

第11号

2019年
1月発行

CONTENTS

折り返し点を迎えて

国文学研究資料館 古典籍共同研究事業センター長

谷川 恵一 ①～③

〔異分野融合共同研究〕

歴史資料を活用した減災・気候変動
適応に向けた新たな研究分野の創成
茨城大学地球変動適応科学研究機関 准教授

田村 誠 ④～⑤

〔国際共同研究ネットワーク委員より〕
海外日本研究者における資料への
接近容易性
高麗大学校 教授

金 秀美 ⑥～⑦

〔研究開発系共同研究〕
光のふるまいの解析― 古典籍の光学解析に向けた基礎的研究 ―
奈良先端科学技術大学院大学 情報科学領域 准教授
船富 卓哉 ⑧～⑨NW事業における国際展開について
(報告) ⑩

こんな古典籍があった!

― 拠点大学古典籍画像紹介 ― 第3回

⑪

⑫ トピックス

ふみ

「日本語の歴史的典籍の
国際共同研究ネットワーク
構築計画」ニューズレター大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国文学研究資料館
古典籍共同研究事業センター

折り返し点を迎えて

二〇一四年にスタートした歴史的典籍NW事業は、本年度に10年計画の折り返し点の5年目を迎え、科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会の下に置かれた学術研究の大型プロジェクトに関する作業部会による進捗評価を受けるとともに、近年の財政環境に対応した後半の5年間の事業計画の見直しを行った。

七月に文科省で行われた進捗評価では、厳しい財政環境の中で画像情報作成の内製へ向けた取り組みなどの工夫を重ねながら二〇一七年度までに約九五、〇〇〇点の古典籍の画像情報を作成し、それを発信するための新日本古典籍総合データベースを公開したことを中心に、事業全体の進捗状況を国文研館長が報告し、それについての委員からの質問に答

えた。作業部会による進捗評価の結果はすでに文科省のHPから報告・公開されているので詳しくはそちらをご覧ください(大型研究計画に関する進捗評価について(報告)「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」、事業の立ち上げのときからずっと評価を受ける側にいた者として、ようやくここまでこれたかという感が深い。

世界の最先端を行くことを求められている理系のビッグ・サイエンスのプロジェクトがひしめくフロンティア事業の中に人文・社会系ではじめて足を踏み入れることになった本事業の意義を、作業部会の委員の方々をはじめとして、日本文学研究以外の研究者コミュニティの一定の理解を得るまでにはかなりの時間を要した。30万点の日本の古典籍をまるご

国文学研究資料館
古典籍共同研究事業センター長谷川 恵一
たにかわ けいいち

とデジタル画像にして公開することをベースとする本事業が、すでに膨大な書籍の画像データを精度の高いOCRで読み取るデータベースや、画像データを介さずに数万点規模のテキストデータが利用に供されている諸外国の取り組みに比較して、どうしてもプリミティブなものに映えることはやむをえないからである。現代とはまったく異なるくずし字という表記を用いている日本の古典籍を画像データのままで公開してもごく限られた人間しか利用できないのではないかという率直な意見と向き合う場面もあった。こうした反応に対し、われわれは、日本には、勅撰和歌集などのハイ・カルチャーから、庶民向けの戯作といったロー・カルチャーに至るまで世界に類例のない質・量をもつ多彩な書籍が製作され、残されてきていること、それらはいまだ十全には読み取られていない先人たちの知的営為が込められた文化資源であることを事業の前提として説明するとともに、全文画像データによる公開は、そうした資源を国内外の研究者のみならずひろく社会一般に開放してゆくための第一歩であり、画像データへのタグ付けとともにくずし字認識や絵検索の実用化などに取り組むことで、くずし字に馴染みのないユーザにも使っていただけるデータベースとしていくことを掲げ、事業に対する理解を得るように努めてきた。

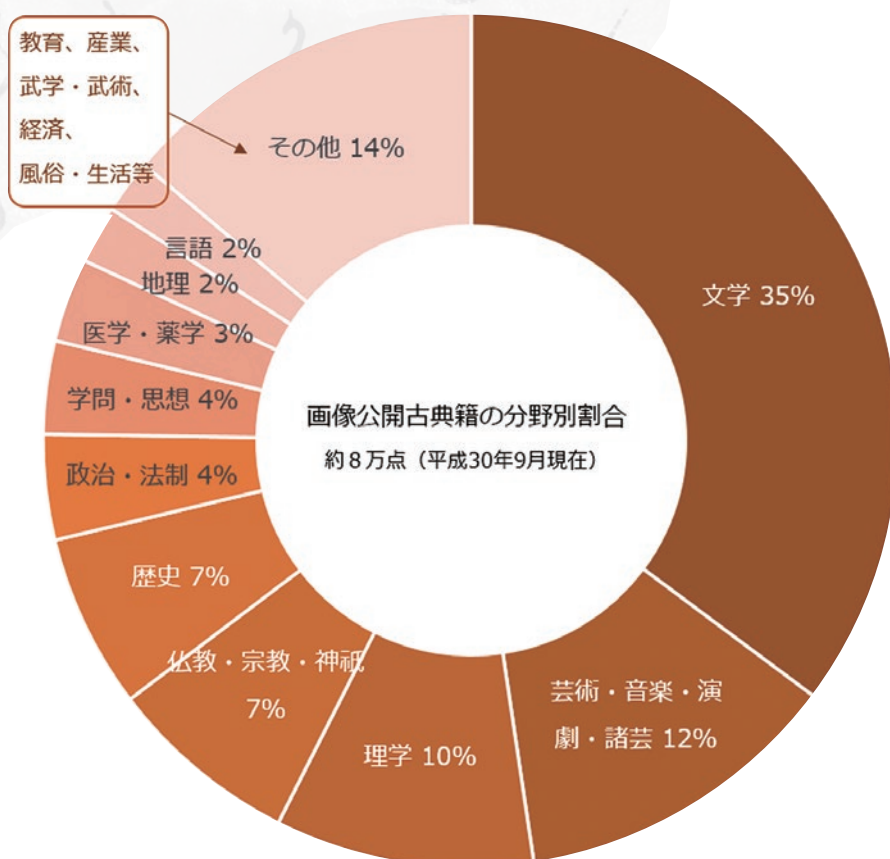
「概ね順調に進捗している」という評価をいただいた今回の進捗評価の冒頭に、「本プロジェクト実施上の基盤となる」新日本古典籍総合データベース」を当初計画どおり公開するに至っている」とことが挙げられ、また、三項目からなる今後の留意点の最初に「データベースの更なる発展に向けた検討」が掲げられていることは、社会的な波及効果として「古典籍に含まれる我が国の知恵の蓄積に広く一般の方々が触れられるようになっていく」ことが指摘され

ていることとあわせ、事業主体であるわれわれにとつてなにより
の理解と励ましをいただいたと思っている。これまで図書館の書庫に貴重書として眠っていた日本の古典籍をデジタル化してネットワーク上に移すことだけがわれわれの事業の目標ではない。ネットワーク上に日本古典籍を網羅したプラットフォームを構築し、デジタルデータを高度活用するための検索機能の開発を梃子として、それらを用いた新たな研究動向をグローバルな視野の中から創出していくことを、事業が中間地点にさしかかった時点で再度われわれの目標として確認しておきたい。AIを軸とする近年の情報技術の進展は、世界的にみればいわばビリからスタートしたわれわれの画像データベースを基盤とする事業が最先端に迫り、可能性を開いて見せてくれているのである。

進捗評価と並行して行った事業計画の見直しは、当初計画において88億円であった事業全体の経費を、近年の財政環境に対応させる形で主として当初計画の共同研究経費分を削減して39.5億円に圧縮するとともに、こうした共同研究経費の減少と連動させて、機関連携による研究ネットワークの拡充を当初の二〇一九年から最終年度にまで4年間延長しようとするものであり、このことについて、作業部会に了承していただいた。データベースの構築と、それに基づいた公募を含む多彩な共同研究の展開を通じたネットワークの構築・拡充とを両輪としていた当初計画を、データベースの構築に比重をおいて見直したわけで、したがって、30万点を目標とする画像データベースの構築とその検索機能の高次化という目標に変更はない。

本年度九月の時点で、新日本古典籍総合データベースから公開している古典籍の点数は約8万点であり、その内訳は表のように

なっている。残る20万点強の古典籍のデジタル化に向け、画像情報作成における内製の拡充など一層の工夫をこらしながら事業の後半に臨んでいくことになるが、日本文学の一研究者としては、3万点にも及ぶ文学分野の古典籍がすでにネットワーク上で閲覧できるということに、やはりある種の感慨をおぼえずにはいられない。



江戸期までの日本文学研究の基礎ツールとして垣内松三と毛利昌が編んだ『国文学書目集覧』が刊行されたのは一九三〇年のことだが、そこに掲出された著作は約1000点で、源氏物語に関する注釈書や論文として掲げられているのはわずか80点弱にすぎない。国文研が作成・公開している国文学論文目録データベースでタイトルに源氏物語を含む論文を検索すると約1万2000件だから、単純にいうと、90年足らずの間に、対象とする著作数が30倍、研究論文などの数が150倍も増えていることになる。研究者が一人で扱うことができる量をこれはもうはるかに超えている。

人は一生の間にどれほどの本を読むことができるか、フランス文学研究者の渡辺一夫が計算してみせたことがある。「七歳の時から本を読み始めて六十歳迄毎日一冊づつ読書すると仮定すれば、 $60 \div 6 \parallel 54, 365 \times 54 \parallel 19710$ となるから、一万九千七百十冊読めるわけになる。然し、中には膨大な著書もあるだらうし、僕も病気になるったり、休んだりするから、結局は右の数の三分の二或は半分位に減るだらう。つまり一万三千百四十冊か九千八百五十五冊になるだらう。それでも大した数である」〔書籍について〕、『魚の歌』（一九四一年）。30万点に及ぶ著作についてはいわずもがな、源氏物語の論文は今でも数多く書かれつづけているから、それらだけを毎日1編ずつ読んでいったとしてもとても追いつかない。こうした個人の力量を超えたデータとどう向き合っていくのか、本事業が中間地点を迎えた現在、研究者がそろそろ本気で考える時期が来ているようだ。

【異分野融合共同研究】

歴史資料を活用した減災・気候変動適応に向けた新たな研究分野の創成

茨城大学地球変動適応科学研究機関
准教授

田村

誠

今夏の猛暑、豪雨災害などを例に挙げるまでもなく気候変動は喫緊の課題である。気候変動への対応は、緩和策と適応策の二つに分けられる。省エネルギー、再生可能エネルギー利用などの温室効果ガス削減によって気候変動の抑制を目指す緩和策とともに、悪影響に対して人間社会が調整するための適応策が求められている。日本では緩和策が先行していたが、近年は農業、暑熱、自然災害など、様々な分野で気候変動影響が顕在化し適応策が注目されるようになってきている。気候変動影響や適応に関する研究の進展と並行して、社会では二〇一五年十一月の「気候変動の影響への適応計画」の閣議決定を経て、二〇一八年六月に気候変動適応法が成立するまでに至った。

こうしたなか、筆者の所属する茨城大学地球変動適応科学研究機関(ICAS)は国文学研究資料館と二〇一七年五月に学術連携協定を締結した。国文学研究資料館「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」の一環で「歴史資料を活用した減災・気候変動適応に向けた新たな研究分野の創成」に向けた連携を進めている。ここでは、気候変動適応分野では従来あまり取り上げられなかった古文書等を用いたレガシーデータの発掘とデータベース構築を行っている。そして、大規模自然災害や気候変動に対して、古典籍・古記録・古文書等から歴史的な災害対応、適応の様相を明らかにし、将来への減災・気候変動適応に向けた文理融合型の新

たな研究分野、いわば「温故知新の影響評価、適応研究」の創成を目指している。

気候変動影響・適応研究は、①気候モデルと地域ダウンスケール、②影響予測・脆弱性評価、③適応策の設計・実施、④適応策の効果モニタリング・評価の四段階に分けられる。これまで①、②の気候変動影響評価は、概ね二十世紀後半以降の観測等のデータから二十一世紀末頃までのシナリオ分析を予測値として表現してきた。気候変動の社会影響評価は、このシナリオ分析から演繹的に計算される予測結果を提示することになる。しかし、歴史的な災害被

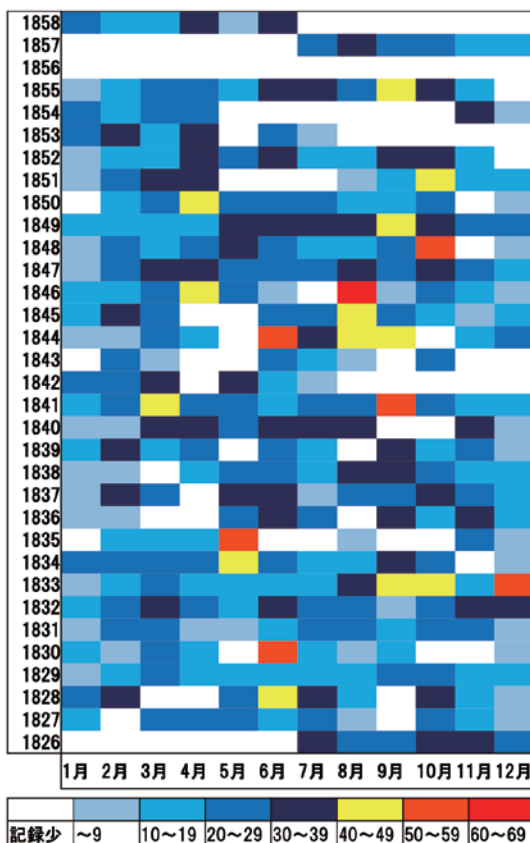


図1 「家事志」から復元した月別降水日数の各月ごとの割合(%)

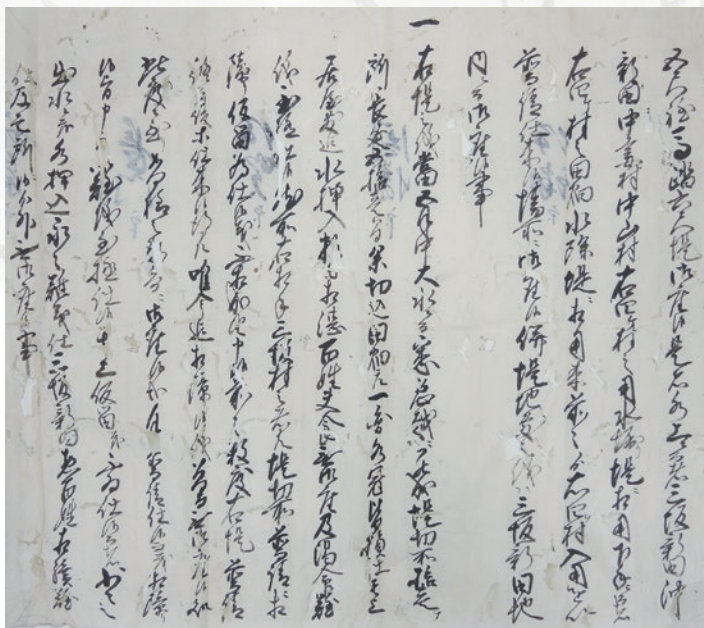


図2 現在の常総市の村々を取り囲んでいた「惣囲堤」の存在を示す訴状(猪瀬家文書)

害、農業生産性の変化には気候外力の違いだけでは説明できない社会的要因も寄与している。さらに農業生産性の低下が一揆、大規模移住、統治体制の変化などを引き起こす事例もあるが、こうした複雑な連関をモデルに組み込むのは困難であった。

①の気候モデル分野では、近年、ある災害が気候変動由来なのか、その他の自然変動由来なのかを区別するEvent Attribution(EA)という要因分析手法が提案されている。EAは、大気大循環モデルを用いた過去の多数アンサンブル実験から極端現象の発生確率を求めて、地球温暖化が近年の異常気象や極端現象に与える影響を定量化しようとする手法である。本研究の成果は、②、③の影響評価、適応評価の範疇でさらに社会変動をも考慮した「適応版EA」

の開発へ発展する可能性を秘めている。

これまで自治体史から近世の災害データベース構築、十九世紀中期に書かれた水戸の高氏日記や土浦の家事志等の解説を通じて、気象、災害、農業等で定量化可能な

データを抽出してきた。例えば、土浦での一八二六―一八五八年の降水日数や洪水等の情報を抽出し、現在の気象と比較している(図1)。

さらに本チームでは、二〇一五年の関東東北豪雨で被災した常総市で「惣囲堤」の存在を示す訴状を発見した(図2)。そこには、三坂新田村(常総市三坂新田)が周辺の田畑よりも約1.2〜1.5メートルほど低く、集落全体を堤に囲まれて暮らしている村であること、その「惣囲堤」の高さは1.5m、総延長は約3kmに及ぶ規模であること、一七五七年(宝暦七年)六月の「大水」によって約90mにわたって切れ込み、田畑全体が水に浸かって作物が全滅したことなどが記されていた。

防災分野では、様々な先人の知恵や教訓を現在の気候変動適応に生かす試みも行われている。二十世紀後半の日本の治水は、河川堤防や護岸などのハード対策に重点が置かれてきた。しかし、インフラの老朽化、維持管理費用が上がる一方で降雨などの気候外力も増大し、洪水を受け流す、ソフト対策の必要性が改めて指摘されている。気候外力が増大すると予想されるなか、水害などの自然災害への順応、適応を過去の経験から学ぶことは多い。過去の災害データを基に豪雨や氾濫等の過去再現計算を行い、現在や将来への教訓を得ることが期待される。

謝辞

本稿は、茨城大学と国文学研究資料館の共同研究「歴史資料を活用した減災・気候変動適応に向けた新たな研究分野の創成」に基づく。その一環として、茨城大学の小荒井衛理学部教授、野澤恵理学部准教授、添田仁人文社会科学部准教授、伊藤哲司人文社会科学部教授らの成果をまとめたものである。

【国際共同研究ネットワーク委員より】

海外日本研究者における資料への接近容易性

アクセスビリティ

高麗大学校 教授

金

秀美

もともと、私は紙の本が好きだ。図書館の古書の匂い。書物のページをめくる度、感じられる紙の感触。しかし、そのような私でも、データベースやオープンサイエンスを利用せずには研究が進まない。もはやそのような時代になりつつある。

二〇一七年と二〇一八年の七月、私は、古典籍共同研究事業センターの所管する「国際共同研究ネットワーク委員会」とその翌日に開かれた「日本語の歴史的典籍国際研究集会」に出席する貴重な機会を得た。その場で、「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」の基盤として、文学・医学・理学分野等の古典籍の画像化を行い、そのデータを搭載した「新日本古典籍総合データベース」についてくわしい話をうかがった。私のような海外にいる日本研究者にとっては大変うれしいニュースにほかならない。

日本留学を終え、韓国に帰ってきて、幸いに母校高麗大学校で教鞭をとることとなり、研究と教育の道をあゆむことができた。その時、一番不便を感じたのは、資料収集の難しさであった。「原文複写」「相互貸借」という学内にある中央図書館の研究支援サービスを利用し、日本の研究書や論文などを入手することはできるが、実物を見るまで二週間ほどの時間がかかる。待ち焦がれた資料が到着すると、その資料からまた必要な資料が見付かり、資料を申し込み待つ行動を繰り返し返さなければならない。このような資料収集の問題は、海外で活動する研究者なら、多かれ少なかれ経験したはず

である。

それが、だんだん日本における諸研究機関でデータベース事業が進むようになり、韓国にいなから、直接日本の研究資料を見られるようになった。国文学研究資料館で二〇一七年から正式に公開された「新日本古典籍総合データベース」は、書名・著者名・キーワードでの検索にとどまらず、画像タグ、本文テキストから探すこともでき、検索機能を一層高めている。

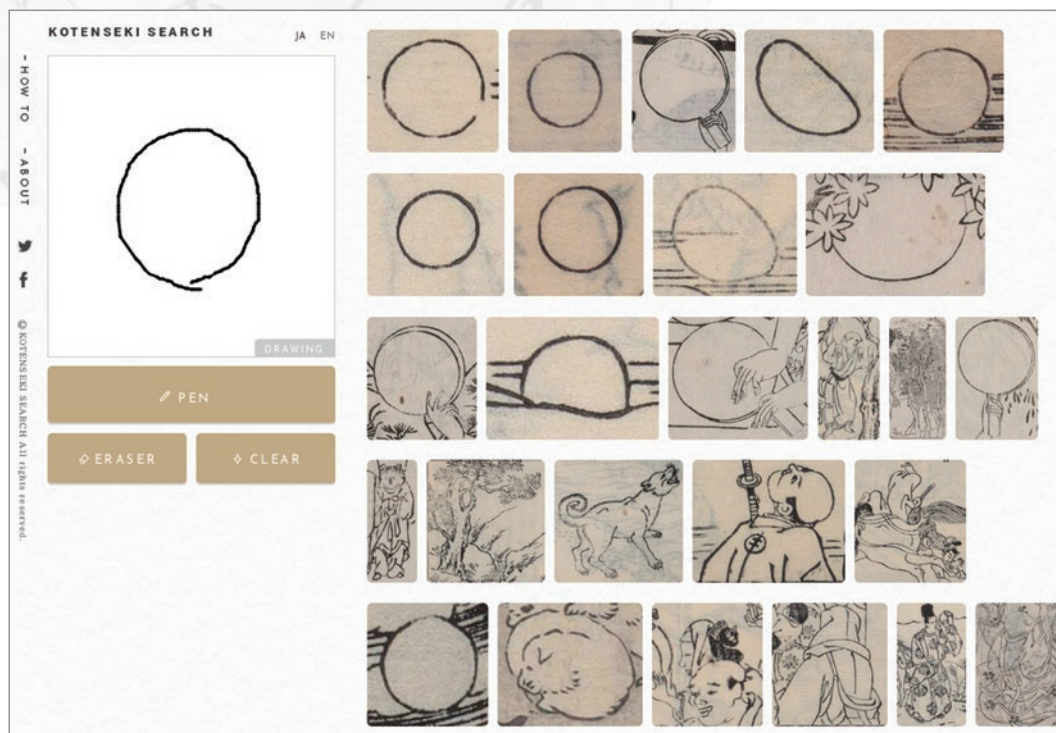
もちろん、日本古典籍の原文・画像を直接見られることも、ダウンロードすることもできる。海外研究者にとっては、まことにありがたいことである。

その多彩な検索機能の中で、特に、私の関心を引いたのは、佐藤真一国立情報学研究所教授を中心に行っている古典籍画像検索に



新日本古典籍総合データベース 検索トップページ

関する共同研究であった。その報告によれば、手書きスケッチによる検索・類似画像の検索までできるといふ。画面をいちいち探さなくても、この画像検索を使って、自分が探している図柄や事物などを簡単に見つけることができる。この驚くべき検索機能の開発により、今後新しい研究方法が試みられるようになり、さらなる研究



古典籍スケッチ検索 検索画面

成果が得られると思われる。(参照:「古典籍スケッチ検索」ページ http://labniji.ac.jp/sketch_search/)

この事業は、国文学研究資料館が中心となり、日本内外の大学・研究機関が連携して実施するものである。その意気込みに相応しく、対象とする日本の古典籍は、日本国内のみならず、将来的には海外にある所蔵書までも視野に入れて推進している。日本の古典籍の所蔵先が海外である場合、その書物が流入された経緯や事情背景などが、国々によって異なるはずである。今後、日本内外を含む古典籍のデータベースの構築事業を基盤にして、そのような多角的な研究まで深めることを願っている。

現在私は、日本の豊富な視覚的資料・画像を、自身の研究のみならず、大学の授業にも活用している。徳川・五島美術館本『源氏物語絵巻』『信貴山縁起絵巻』『伴大納言絵巻』のような平安時代の物語絵巻や説話絵巻を用いて、韓国の学生に日本の古典や文化を教える。また、職人絵などを使い、「日本職業と社会相」などを説明したりする。このような文字テキストではない、図像を用いて視覚的に接近する方法は、外国の人々により理解しやすい方法といえよう。今の若い世代は、資料調査や学習に、インターネットやオープンサイエンスなどを活用するのにごく慣れている。従って、このようなデータベースの構築事業と常用化は、単に現在の専門研究者のみならず、古典籍の利用者の底辺を拡大し、海外の次世代の研究者の育成にも寄与するはずであろう。

したがって、多彩な機能を有する「新日本古典籍総合データベース」による資料利用が、今後日本国内・海外の研究者において、資料への接近容易性を確保することとともに、次世代の教育へと活用されていくことを期待するのである。

【研究開発系共同研究】

光のふるまいの解析

― 古典籍の光学解析に向けた基礎的研究 ―

奈良先端科学技術大学院大学 情報科学領域 准教授

船富 卓哉
ふなとみ たくや

「新日本古典籍総合データベース」で公開されている画像データをみるに、撮影された時期によるバラツキはあるものの、高精細なカラー画像が多く収録されており、その質と量は圧倒的である。その撮影には、多大な労力と長年のノウハウが詰まっていると推察される。センターHP上で公開されている「日本語の歴史的典籍のデジタル化に関するマニュアル」(<https://www.nijl.ac.jp/pages/cjproject/database.html#section03>)によれば、デジタルカメラまたはブックスキャナーによって撮影が実施されており、例えば「裏写りが激しく、判読が困難な場合には間紙を入れて撮影すること」「背景やのどの部分に極力影が出ないように撮影すること」等々、さまざまな注意事項が詳細に記載されている。特に資料が湾曲している場合には影が出やすいため、ガラスで押さえてもよいこととなっている。ガラスによって資料を押さえることで均一に照明が当たり、撮影画像の品質を保つことができるからだ。ただし、そのような際にも貴重な資料に負担がかからないよう、さまざまな注意事項が併記されている。

資料を撮影する際には均一な照明を当てるのが理想的であるというのは、古典籍や歴史史料の撮影経験のある方なら誰しも同意

されるところであろう。しかし我々は、敢えて不均一に資料を照明した状態で画像を取得し、さまざまな条件下で撮影された画像を計算処理することで、資料における光の伝播を解析する取り組みを行っている。本稿ではその取り組みについて少し紹介したい。

光源から放たれた光は直進し、物体に当たったところでその方向を転換する。その代表的なものが資料表面での「反射」であり、我々が普段目にして光の大部分は反射光であろう。ただ、光はそれ以外にも複雑なふるまいをする。例えば、資料の内部にも光が浸透し、散乱して、表面に出てきた成分も観測される(図1)。古典籍の撮影において問題となる裏写りは、このような資料内部に浸透した成分である。均一な照明を当てて撮影すると、反射光だけでなく散乱光も一緒に観測されているのだ。

裏写りの激しい画像に対して、コントラストを調整する処理を計算機で行い、その画質を改善するような技術はこれまでにあつ

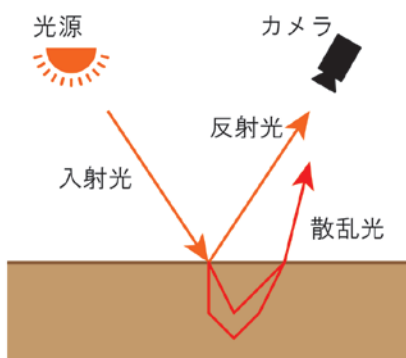


図1 光の反射と散乱

た。しかし、我々の研究分野で近年注目を集めているコンピュータシヨナルフォトグラフィ(computational photography)の技術を用いれば、単なるコントラスト調整ではできないような画質改善が可能となる。コンピュータシヨナルフォトグラフィでは、後から計算処理することを前提として、光源やカメラを制御した特殊な撮影を行う。

例えば、光源としてプロジェクタを用いてパターンを資料に投影し、そのパターンを切り替えながら画像を撮影すると、反射光と散乱光をある程度分離して抽出することができる。1行分だけ白、残りは黒の画像を投影すると、反射光はプロジェクタで照らされた1行が当たった表面だけから観測されるのに対し、散乱光は資料内部で空間的に広がり、幅広く観測される(図2)。プロジェクタとカメラをうまく配置すれば、常に同じ位置で反射光が観測されるようにすることができる。そうすれば、その位置以外で観測される光は全て散乱光ということになる。実は、反射光の部分にも散乱光も含まれているが、一様に照明した場合には資料全面からの散乱光の影響を受けるのに対し、この撮影法であれば1行のみを照らした散乱光しか含まれないため、その強度には大きな差がある。そのため、散乱光の影響を大きく抑えることができる。

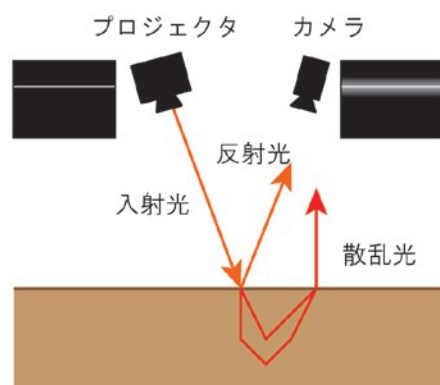


図2 反射光と散乱光の分離撮影

影したデータ1つからは、プロジェクタ1行分の画像しか得られない。そのため、プロジェクタで表示する白い行を順次変えて走査すれば、資料全体の画像を得ることが可能となる。ただし普通に実施すると、資料1ページについて数百・数千回の撮影が必要となり、時間がかかりすぎて現実的ではないだろう。しかし、走査型のプロジェクタとローリングシャッターという方式のカメラを同期して撮影すれば、たった1度で反射光だけの画像を取得することも可能である(図3)。

裏写りを抑えた撮影には反射光のみの撮影が有効であろうが、資料の内部に浸透した散乱光も重要な情報を持っている。ページの状態が悪く、めくることが資料を破損する恐れがある場合、ページをめくらずに裏側から散乱光を撮影して解析することで、中に書かれていることを透視できる可能性もある。散乱光は、プロジェクタで照らされた1行から離れていくと徐々に弱くなる。この減衰の仕方は、資料の内部で浸透した深度やそこに書かれていた内容とも大きく関係していると考えられる。

我々は、国文学研究資料館との共同研究として、ページをめくることなく透視撮影を行う技術の開発に現在取り組んでいる。試みはまだ始まったばかりであるが、データベースに収録される画像の質・量の向上に繋がる技術が開発できることを願ってやまない。



図3 撮影装置

NW事業における国際展開について(報告)

「国際共同研究ネットワークの構築」を目指す本事業では、画像の公開推進に加え、七月の研究集会以外にも、様々な形でその成果を国際的に発信しています。そうした取り組みを幾つか紹介したいと思います。

二〇一八年九月九日から十一日にかけて、「日本デジタル・ヒューマニティーズ学会(JADH)2018」および人文資料を適切にデジタル化していくための基準策定(Text Encoding Initiative)を行う国際プロジェクトで、今回アジア初の「TEI conference 2018」が、学術総合センター(東京)を共通会場として開催されました。十日、両者合同での基調講演に、当館のキャ



JADH/TEI 基調講演

ンベル館長が「The NIL Database of Pre-modern Japanese Works」と題して登壇。本プロジェクトを世界各国の研究者の方々に紹介するとともに、分野横断的なコラボレーションが生む革新性や、それを目指す当館の具体的な取り組みなどについて説明しました。

また、同月十四日、バルト三国の一つ、リトアニアのカウナスで開催された第29回日本資料専門家欧州協会(EAJRS)年次大会では、「歴史的典籍NW事業における日本古典籍のデジタル化コレクションとその利活用」と題し、ウェブ上で公開中のコレクションや歴史史料について、検索方法なども含めた説明を当館教職員三名が行ないました。こうした海外に向けた取り組みは、今後、国際共



ドイツ・ハイデルベルク大学WS



イタリア・ミラノ大学研究集会



EAJRS 年次大会

同研究ネットワーク構築を推進していく上で不可欠なものとなりましょう。引き続き積極的に取り組んでいく所存です。

また、共同研究においても、海外連携機関先でのワークショップやシンポジウム等の開催を推進しています。「国際共同研究」では、本年度から開始された「古典芸能における身体―ことばと絵画から立ち上がるもの―」研究班が、九月十九日にイタリア・ミラノ大学で研究集会を開催しました。また、「異分野融合研究」では、「GISを用いた総合地域情報に関する国際発信方法に関する研究」研究班が、ドイツ・ハイデルベルク大学にて「デジタル日本文学地図―コンテンツ・機能・将来への展望」と題した国際ワークショップを九月十一日・十二日の両日開催。この取り組みは、ハイデルベルク大学・大阪大学という、国内外の関係機関が協力し開催したものであり、スイスや日本からも研究者を招き行われました。こうした海外の研究者との共同研究等については、今後もこの「ふみ」紙面で紹介していきます。

こんな古典籍があった！～拠点大学古典籍画像紹介～第3回

歴史的典籍NW事業では、二〇一五年度から、拠点大学における古典籍の撮影を実施しています。新日本古典籍総合データベースで公開された古典籍から、各大学おすすめの一点をご紹介します。

●慶應義塾大学信濃町メディアセンター(北里記念医学図書館)所蔵『耄耋獨語(もうちどくご)』杉田玄白著 書写年不明

DOI: <https://doi.org/10.20730/100244409>

本書は蘭方医として著名な杉田玄白が老いに悩む様子を語った随筆です。文化十三(一八一六)年八十四歳の著作とされています。書名は「老人の独り言」、自序の「九幸翁(きゆうこうおう)」という号は生涯の多幸に感謝を表す意でしょうか。当時としては長寿で羨ましがられたよう

うですが、齢を重ねて出来る身体の不調を医師の目で描き、長生きは他人が思うほど楽なことではないと語っています。自伝的な随筆『玉味噌』との合本で、本学医学部において医史学を講じた富士川游博士旧蔵書の一冊です。

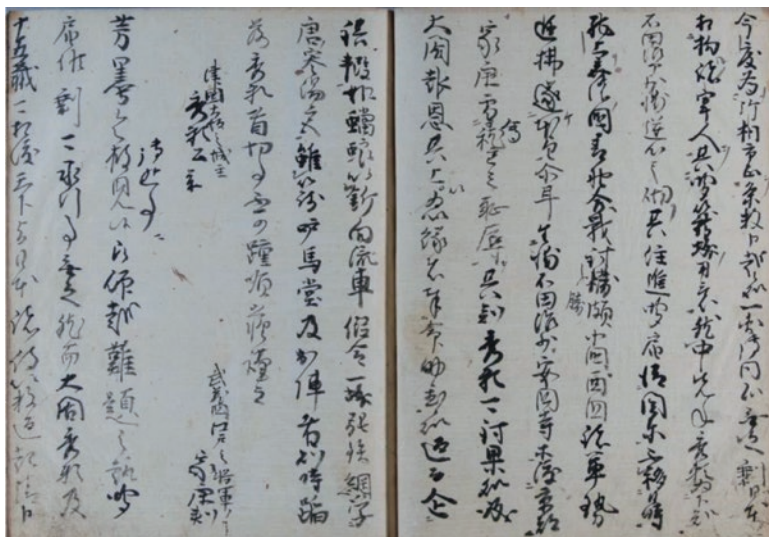


(該当部分を見る: <http://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100244409/viewer/6>)

●名古屋大学附属図書館神宮皇学館文庫所蔵『かさね草子(かさねぞうし)』書写年不明

DOI: <https://doi.org/10.20730/100168224>

元和寛永年間に書かれた雑記随筆の原本で、俳諧や狂歌の聞書など雑多な記事を豊富に収めています。たとえば後年「大坂状」として流布する家康と秀頼の往復書状も載せており、ほぼ同時代の収録として注目されます。近世は(雑記の時代)ですが、初期のものとなると流石に稀れではないでしょうか。本書は伊勢の地で成ったもので、同地の文化的先進性を物語っているようです。



(該当部分を見る: <http://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100168224/viewer/45>)

※画像の転載や翻刻掲載などを希望される場合は、利用条件のページ(<https://kotenseki.nijl.ac.jp/page/usage.html>)を必ずご確認ください。

イベント開催予定

■総合書物学シンポジウム

書物を耕す―総合書物学の挑戦―

〔日時〕二月十七日(日)

十一時〇〇分～十七時〇〇分

〔会場〕奈良女子大学 文学系N棟・国際交流センターN302教室(奈良市北魚屋西町)

〔主催〕人間文化研究機構 広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による「総合書物学」の構築」

奈良女子大学大学院人間文化研究科

オープンデータセットの拡充

■古典籍の全冊画像を作品まるごとダウンロードできる「日本古典籍データセット」の作品数を一月下旬に、一七六七点から約三千点まで拡充予定です。

<http://codh.rois.ac.jp/pnjl/>

■「日本古典籍字形データセット」が、「日本古典籍くずし字データセット(Kuzushiji Dataset)」と名称を変更し、データセット名に「DOI(10.20676/00000340)」も付与されました。

「日本古典籍データセット」の拡充に合わせて、一月下旬に現在の文字数約四〇万文字に約二十八万文字を追加予定です。

<http://codh.rois.ac.jp/char-shape/>

英文オンライン・ジャーナル刊行

Studies in Japanese Literature and Cultureの創刊号「BORDERS」が歴史的典籍NW事業のウェブサイトから七月に刊行されました。二〇一九年三月にはVolume 2も刊行予定です。

<https://www.nijl.ac.jp/pages/cjproject/sjlchtml>

拠点大学等の所蔵資料の画像公開

「新日本古典籍総合データベース」は古典籍の

ポータルサイトとして、当館所蔵資料だけでなく、様々な機関の所蔵資料の画像も公開しています。連携して本事業を推進している国内拠点大学の資料は現在約二万点が閲覧可能で、今後さらに拡大していきます。(本号三頁、十一頁参照)

拠点大学以外で最近公開されたものとして、東京書籍株式会社附設教科書図書館 東書文庫が所蔵する往来物(昔の教科書)なども利用可能です(七月六日公開)。今後多様な分野の貴重な資料を公開していきますので、ぜひご利用ください。

イベント報告

本号十頁で紹介しているものを以外を報告します。

■中高生向け講演会「図書館で！ネットでも！楽しい古典籍―おいしい江戸料理本の世界」(八月二日(木)、国際子ども図書館)

■古典籍セミナー【九月六日(木)、カリフォルニア大学バークレー校(アメリカ)】

■公開研究会「古典籍画像に対する文字認識と内容解析への取り組み」(十月九日(火)、国文学研究資料館)

■第二〇回図書館総合展にブース出展【十月三十日(火)～十一月一日(木)、パシフィコ横浜】

■「古典オンラインハンターIN京都」(十一月十八日(日)、京都大学附属図書館)

■絵入本ワークショップXIにブース出展【十二月十五日(土)～十六日(日)、明知大学校(韓国)】

協定書・覚書の締結

・中古文学会 (覚書 六月二十一日)

・中世文学会 (覚書 六月二十五日)

・日本武道学会 (覚書 七月二日)

・実践女子大学・実践女子大学短期大学部 (覚書 七月五日)

・ゲート大学フランクフルト・アム・マイン (協定書 九月七日)

ふみ 第12号は、

2019年6月

発行予定です。

■表題の背景色は黄蘗色(きはだいろ)です。この色はミカン科の木、キハダの樹皮を用いて染めた鮮やかな黄色を指します。黄蘗で染めた紙には防虫効果があり、古くから写経用に使われていたといわれています。

■本誌「ふみ」各頁の背景は当資料館蔵の「方丈記」(本阿弥光悦流の書体を模刻した嵯峨本)を利用しています。

■表題「ふみ」の書体は、石川島造船所(現IHI)創業者の平野富二が明治十二年六月に刊行し当館所蔵の「BOOK OF SPECIMENS」(活版印刷見本帳)を利用しています。

ふみ

「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」ニューズレター第11号

〈発行日〉

平成31(2019)年1月15日

〈編集・発行〉

国文学研究資料館

古典籍共同研究事業センター

〒190-0014

東京都立川市緑町十一三

TEL 050-5533-2988

FAX 042-526-8883

<http://www.nijl.ac.jp/pages/cjproject/>

当館所蔵の「狂言絵」がご覧になれます。
携帯電話又はスマートフォンのアプリ等で、左記のQRコードを読み取りご覧ください。

